

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利さん



最近、俳句や川柳が人気です。私が発行する生活情報誌「悠悠と。」の誌面でも、俳句と川柳のコナーを設けていたことがあります。その中の俳句は「悠悠俳壇」と称して41回続きました。

きっかけは読者にも参加してもらいたいと考えたことで、「リラ冷え」という季語の生みの親、榛谷美枝子さんに指導をお願いしました。彼女の句集「雪礫」に、「リラ冷えや睡眠剤はまだきいて」「リラ冷えやすづくに甘えてこの仔犬」などがあります。「リラ冷え」はこれが初出で、その後、渡辺淳一さんの「リラ冷えの街」によって広く知られるようになったそうです。この句集は今も手元にあります。たまに開きます。



その頃、榛谷さんが月に一度、札幌の円山で催していた楽しい飲み会がありました。私も参加していたので、気軽にお願ひしたのですが、よく考えるところで90歳目前。「私はもう年ですから、良い人を紹介してあげる」と、同じ会に参加されていた谷口亜岐夫さんに頼んでくれました。

谷口さんは、1996年に「札幌市民文化奨励賞」、2008年には「札幌芸術賞」

を受賞。細谷源二氏が創設した俳句結社「氷原帯」において、03年から第4代主宰として活躍されるなどした俳句界の重鎮です。「初心者ばかりですが、いいですか」と聞くと、「まじめにやるなら見てもいいよ」と快諾。以来、大変熱心にご指導くださいました。



12年7月に札幌市南区の紅桜公園に先生の句碑が建立されることになりました。その除幕式に、「末席とはいえ君も私の教え子なのだから」と私も招かれましたので、緊張の中、玉串奉奠をしてきました。その時、「それにしても本当に素人ばかりだな。それ

だからこそ面白いな」と言われたことを思い出します。

この句碑には、「生きものの声挙げて笹起ち上がる」とあります。長い冬の間、雪の下で耐えてきた笹が雪解けとともに勢いよく立ち上がる音が、生きものの喜びの声に聞こえると詠んだものだそうです。先生はこの式の後、病に倒れ、一度は快方に向かったものの再発し、帰らぬ人となりました。そこで、「悠悠俳壇」も終了となりました。

谷口先生は今頃、榛谷さんと一緒に天国で吟行を楽しんでいるかもしれません。「悠悠と。」のためにと、「満りに大河をめざす意志かたく」という句を詠んでくださいました。残念ながら、いまだ大河にはたどり着かず、道半ばという状況です。

俳句や川柳は頭の鍛錬に最適。皆さんも五七五で、今を切り取ってみませんか。